

18. Center-bridging braceによる内側型変形性膝関節症の治療経験

練馬区整形外科医会

○丸山 公、星野 孝、林 一徳、
丸山 徹雄、市毛 繁実、吉見 知久、
石井 聖佳、仁科 文男

医療法人社団遼山会 関町病院
整形外科 風間 貴文、大国 央志

【目的】

内側型変形性膝関節症（以下内側OA）に対するCenter-bridging brace（以下CB装具）の効果を評価し、その適応について考察する。

【対象】

CB装具を使用した内側OAの142例のうち、CB装具使用前と使用後3ヶ月の評価が得られた症例のうち、評価項目の85%以上が満たされており、痛風、偽痛風、関節リウマチなどの疾患や膝手術例、観察期間中のステロイド注射例を除いた110例152関節を対象とした。これらは、男性13名、女性97名であり、両膝治療例が42名含まれた。年齢は、51～91歳（平均71歳）であった。

【方法】

CB装具を装着し、自宅で可能な筋力訓練およびストレッチングを指導した。使用前と使用後3ヶ月の時点で、診察、レントゲン、患者立脚評価（日本語訳WOMAC）を行った。レントゲンによる重症度分類にはKellgren-Lawrence分類（以下KL分類）を用いた。0（none）：0例0関節、I（doubtful）：25例32関節、II（minimal）：34例47関節、III（moderate）：31例38関節、IV（severe）：20例35関節であった。

【結果】

3ヶ月時で装具装着と非装着で立位レントゲンを119関節で比較した。装具装着により、関節裂隙が少しでも開大したのは24関節（20%）にとどまり、結果との関係は無かった。関節可動域を112関節で調査し、54関節では変化がなかったが、28関節（25%）では10度以上の改善が見られた。WOMACの結果を、11ポイント以上増加した例を改善群、11ポイント以上減少した例を悪化群とすると、KL分類別の改善率と悪化率はそれぞれ、I：84%と4%、II：65%と9%、III：55%と0%、IV：70%と10%であった。悪化例11例には、肥満（10例）、糖尿病（1例）、高脂血症（4例）、高血圧症（5例）、甲状腺疾患（2例）、骨粗鬆症（2例）、脊柱管狭窄症（2例）、下肢静脈瘤（1例）、慢性リンパ性白血病（1例）などを合併していた。

【考察および結語】

保存療法に抵抗する変形性関節症は、一般的に手術療法が考慮されるが、年齢や合併症により苦慮されることが少なくない。本症に対するこれまでの膝装具はあまり有効ではないとされているが、今回の調査から本CB装具はあらゆる重症度に対しておおむね有効な効果を示し、CB装具による治療法は選択枝の一つに加えてよいものと思われた。